

第十一回 しませ 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『奨励賞』

【小学生作文の部】

私のおばあちゃん

千代野小学校五年 阿江 あえ みなみ

私のおばあちゃんは、三年前の九月に亡くなりました。くも膜下出血でした。

その日、おばあちゃんは、おじいちゃんと一緒に黒部峡谷に来ていました。トロッコ電車の終点で降りて、温泉まで歩いている途中で、急に具合が悪くなり倒れました。近くの温泉の人が、偶然、看護師をしていた人で、すぐに心臓マッサージをしてくれました。救急車では遅くなるので、ヘリコプターが来ることになりました。でも、山の中なので、ヘリコプターが降りれる広いところまで、おばあちゃんを運ばなければなりません。みんなが交代でマッサージをしながら運んでくれました。みんな精一杯のことをしてくれました。でも市民病院に着いてからも意識が戻らず、とうとうおばあちゃんは亡くなってしまいました。私とお母さんとお兄ちゃんは病院にかけつけましたが、間に合いませんでした。おばあちゃんはまだ、眠っているだけのように感じました。

病院でお医者さんの説明を聞きました。脳のCTを見せられました。

「この辺が、真っ白になっているでしょう。これは出血のあとです。これだけ出血しているという事は、おそらくあつという間に意識を失って、何も苦しむことなく亡くなられたと思います。」
と言われました。私は、おばあちゃんが苦しまなかったと聞いて少しほっとしました。

おじいちゃんは次の日、お寺に用事で行く途中、知り合いのお医者さんにばったり出会いました。おばあちゃんが亡くなったときの事を話すと、その人は、

「それは多分、手のほどこしようながなかったんだと思います。倒れてからすぐに病院に運ばれていても助からなかったでしょう。」と言われました。私は、病院にもっと早く運んでいたら助かったかもしれないと少し思っていたので、気持ちが楽になりました。

お葬式の時はおばあちゃんの友達がたくさん来ていました。おばあちゃんは七十才でしたが、テニスが好きで、ねんりんピックにも出たことがあります。テニスの仲間の人達が新しいテニスボールを持って来てくれたので、私とお兄ちゃんですべて一つずつお棺に入れてあげました。私はいっぱい泣きました。

それから、おじいちゃんが役所に届けを出しに行った時、受付の人が、「私が、先月入院していた時、おばあちゃんと偶然同じ部屋だったんですよ。」

と声をかけてくれたそうです。前の月、おばあちゃんは腰痛で入院していたのです。

何日かして、おじいちゃんと、おじいちゃんの弟が助けくれた人の所へお礼に行ったのですが、なんと、おじいちゃんの弟と心臓マッサージをしてくれた人が、お互いに知り合いだったのです。みんな、とてもおどろきました。

私は、おばあちゃんの周りで、知らないうちに人と人がつながって、助けてくれていたのではないかなと思いました。最初は偶然が重

なっているのだと思いますが、何回も続くので、これはもう、何か見えない力が働いているような気がしました。

おじいちゃんは毎年、命日になると、おばあちゃんが倒れた場所にお花を供えてきます。その時、お世話になった人達も待っていてくれます。

おばあちゃんは、亡くなってしまいました。今でもどこかで、私を見守ってくれているような気がします。

私は、友達とけんかをしたり、時々いじわるなことをしたり、されたりもしますが、助けられたり、なぐさめられたりすることもあります。

私の周りの人達も、みんなどこかでつながっていて、助けられたり、力になってくれるのだと思います。だから私は、友達や家族、そして私の周りの人達を大切にしていきたいと思います。

《選評》

おばあちゃんが亡くなってからの、家族やまわりの人たちの動きを見つめながら、人と人とのつながりに気付いていく作品です。

文章が自然体で書かれており、体系も整っています。死という重いテーマですが、それを感じさせず、サラリと表現しており、結論を人と人とのつながりという点に集約していくところに力量を感じる優れた作品です。